

## ラバディストの自己否定論 —— メーリアン研究の視点から ——

佐藤 正 樹

マリア・ジビュラ・メーリアンの生活史を再構成しようとするとき、たちまち大小の空白にぶつかる。重要だと思われる人生の転機においてさえメーリアンの沈黙の前にわれわれは立ちどまることを余儀なくされる。トーマス・ビュルガーは、メーリアンは著述家と画家と版元とを一人でこなす勤勉家だが、自画像も自伝も残さなかったため、その欠落はわれわれが「記述し探求し物語らねばならない」と述べている<sup>1)</sup>。しかし絵師の工房で育ったメーリアンの自己理解は職人世界に根ざし、巧拙むらのないよい製品をできるだけ有利な価格で販売し生計を維持するという精神が身につけていたと考えられるのであるから、職人が自画像や自伝を残さなかったからといって不可解とするにはあたらない。

メーリアンは結婚生活に見切りをつけただけでなく、ふたたび寡婦となった母と二人の娘とを道連れに、ゴットルフ城とハンブルクとを経由してはるばるネーデルラント（フリースラント）の小村ウィーヴェルトに移り住むという思い切った行動に出る<sup>2)</sup>。しかし、なぜ結婚生活を中断するまでして遠くネーデルラントのラバディスト教団に加わったのか。夫ヨーハン・アンドレアス・グラフも妻マリア・ジビュラもその動機をいっさい語らない。わかっているのは、1685年、すでに義兄カスパー・メーリアンの住んでいたワルタ館の教団に加わり、翌年その義兄が他界するや夫がここを訪れて復縁を懇願し、せめてそばにいらしてくれとひざまずきさえて（op de kniejen ... by haar te mogen wonen）頼むのを、「コリント前書」7の解釈の違いまで持ちだしてきっぱり拒絶したこと<sup>3)</sup>、教団の没落を目のあたりにするころ母がこの館で没すると、みずから生地フランクフルトの市民権を放棄して退路を断ち（1690年）、翌91年教団を離れ、9月アムステルダムに引き移ったという事実である。1692年に、かつて夫婦の住んだニュルンベルク市に夫が離婚を申請し認められたとき、メーリアンはすでに教団の人ではなかった<sup>4)</sup>。フランクフルトを発つときに市民権を更新しているため、まだ夫婦関係は決裂していなかったか、いずれ帰郷することもあろうと考えていたにちがいない。ネーデルラントへの途次ゴットルフに寄り道をし、シュレースヴィヒ公クリスティアン・アルブレヒトの注文で花の絵およそ50点を仕上げた<sup>5)</sup> というのであるから切迫した旅ではなかった。夫婦双方において離婚やむなしとの結論にいたるのは、妻がウィーヴェルトに移って以降のことであろう。

では、なぜ夫との別居に踏みきったのか<sup>6)</sup>、なぜラバディストの一員となったのか<sup>7)</sup>、離婚は避けられなかったのか<sup>8)</sup>。こうした当然の疑問を解決すべき決定的な証拠をわれわれは

もっていない。とはいえ、これをメーリアンの「気まぐれ」だというのは論外として<sup>9)</sup>、少なくとも結婚生活の維持よりも大事なことがあったのであろう。その一つが母の扶養問題である。また、代表作『芋虫の書』2巻は夫の支援を得て出版販売された。この意味でも将来の画業が成り立つかどうかの保証もなしに夫と別れる。しかも三人の被扶養者とおのが身とをどう始末したらいいか。人生の岐路をみずから選んだようにさえ見えるのはそのためである。

ラバディスト教団は新たに信者を迎え入れるにあたり、ある種の銚衡を行っていた。メーリアンはルター派の洗礼を受け、のち改革派に改宗したといわれるが<sup>10)</sup>、銚衡の妨げにはならなかったと思われる。そもそもジャン・ド・ラバディが一度はカルヴァンに傾倒し、とくにその予定説はラバディズムに形を変えて組み込まれているからである。事実メーリアンは同行の母と二人の娘（17歳のヨハンナ・ヘーレナと7歳のドロテア・マリーア・ヘンリエッテ）ともども期待にたがわず教団に迎えられた。

メーリアンがラバディとその教団の教えを熟知していたとはいえないまでも、義兄カスパルの教示や読書をつうじてある程度学習したうえでの入信ではあったと考えられる。なかでもラバディの主著といわれる『信心の手引』は複数の独訳版もかなり流布していたらしく、メーリアンがこれを読んだ可能性はあるという<sup>11)</sup>。

『手引』は信者の守るべき15の「義務」と、「原則」と称する、いわば霊操の具体的な12の手順とで構成され、その指導に当たる司牧者の心得として書かれたものである。罪深く卑小な自己を神の前にさらけ出し、神に服従し、神の恵みを祈願、感謝し、神をたたえ、神のみをひたすら愛して他を顧みない。このような信徒の具体的な心構えと実践、すなわち後述する「自己否定」をつうじて神秘的な効果を得ようというのである。「われわれの願望は神と合一することにあり、そのあかつきにはわれわれ自身の欲望も満足も、もくろみも心配事も消え、あたかも自己が存在しないかのごとき境地に達し、ひたすら神のみを見、念じ、愛するようになる」(S. 45 f.)。この願望と目標<sup>12)</sup>は自明な前提とされ、その目標にいたるための修行に参加する意欲こそ、かくなすべしとの神の召命のあかしであって、これが信徒と指導者の第一条件である (S. 97 u. 156)。そしてこの意欲と覚悟と実績とを見極めることが信徒銚衡の、いささかあいまいながらも基準であったと考えられる。

さて、信徒の選別は、メーリアンが入信した当時の教団代表ビエール・イヴォンの人間序列論によって根拠づけられる<sup>13)</sup>。その第一は彼らのいう「この家の成員」すなわちラバディストとして公認された信徒である。この第一群の人々の信条は、心を一にして共同生活をいとなみ、このキリスト教共同体を守りぬく覚悟があること、己の内にひたすら神の国を探し求め、神意を肝に銘じ、己の罪深い欲望を十字架にかけることなどである (S. 354 f.)。信徒の銚衡にあたっては、神の格別な恵みを受け、しかもその確かなしるしがあるかどうかを見定めねばならない。

第一群信徒の信条にふさわしい人物かどうかである (S. 355)。第二群はそのような召命のしるしが十分には認められないため「正式」な信徒に達しない人々であるが、試問後の努力にまちたいというのである (S. 357-360)。第三群はそのような努力への意欲と能力とに欠け、信徒として受け入れがたい人々だが、教団はその建徳のために協力を惜しまない。しかし限られた施設ゆえここでの心霊修行にたれかれ構わず参加させるわけにはいかない。また、なかには授けられた神聖な知識を破廉恥なほど濫用する者があり、教団はおおいに迷惑を被ってきた。神聖な知識の伝授には慎重であれと主の霊の指示も受けている (S. 360-363)。さて、このように信者を区分し、住まいを分かつのは当然であり、しかも原始教会の慣行を踏襲した方法であってみれば (S. 365)、なんら異とするに足りない (S. 368)。

イヴォンはここで一種の弁明書をしたためたのである。しかし信徒の選別は教団に閉鎖的な秘密結社のごとき疑惑を招きかねない。メーリアンの入信する前年、1684年にワルタ館を訪れたジョン・ロックは、ラバディストの教義と生活規範の功罪を、手短に、しかし的確に報告している<sup>14)</sup>。信徒は年齢・性別・身分を問わず試問に合格すれば受け入れられる。信徒に問題が生じたときは、第一に叱責、つぎにサクラメントからの排除によってこれに対処する。教団をここにおいて9年になるが、信徒数は日に日に増加しているという。実数はつきとめられなかったが、イヴォン (Yonn) は100人ほどだと言った。信徒は自分たちのことを話しながらない。とくに生活上の作法と規律については口を閉ざしてしまうので、教団事情をあれこれ聞き出すのに難儀をする。直接神に関係することがらだけでなく合理的な手続を問う場合でさえ、いつも啓示に従って行動するとでもいうようにどこか信心家をひけらかすところがある。友人の仲立ちがあつてここを訪ねたのに、イヴォンとの面会を許されるまでに2時間以上も待たされたあげく、何度頼んでも礼拝の場にも食堂にも信徒の居室にも入れてもらえず、「同胞の玄関 (atrium gentium)」と呼ばれる小屋に留めおかれた。彼らはこの「秘密の家 (secretum domus)」が外部に知れるのをひどくいやがっているようにみえた。「ここがキリスト教の模範というにふさわしいところか」と、わたしにはかならずしもそうとは思えなかった。」

ロックはラバディストの財産共有制を廃止すべき誤りだと述べたあと、教団の本質に目を向ける。主のうながしがあり恵みのしるしが認められたら、一歩進んだ指導が受けられるというのだが、「その恵みのしるしなるものは畢竟するに司牧者イヴォン師の意思と規則とに完全に服従することであるかにみえる。わたしの判断が正しければ、イヴォンは自分のために信徒の上に完璧な帝国を築いたのである。」果たして信徒にたいする譴責と支配がイヴォンにおいてやむのは明白である。「思うに信徒らは世間からひどく隔てられている。概して立派な、模範的な暮しぶりだが、ことばを交わした人たちの口調、態度、身だしなみは、いくらかタルチュフを連想させる。同時に、その談話から人並み以上の清浄を保っていることが察せられはする

けれども、天国へ行けるのは自分たちをおいてほかはないとでも言いたげだ。」<sup>15)</sup>

イヴォンは理想を掲げる。「しかし彼らは太陽とすべての星の光、輝きを全部足してもなお表現しつくせぬほどの光にみたまされたが、同じように万人、すなわちもつとも卑しい人からもつとも貴い人までだれもが預言どおり神を認識し、その内面の声を聴き識別し理解するほどに照らされねばならない。」<sup>16)</sup>しかし人ないし信徒を三群に区分けし、神の恵みと召命に浴しうる者をそうでない人から分離して、教団の分離主義を助長した少なくともその一人がイヴォンではなかったか。選ばれた人だけで構成されるこの閉鎖的共同生活に多少なりとも疑問をいだいたのはロックだけではない<sup>17)</sup>。それでもメリアンはこのような共同生活をあえて選び、信徒の区分に従ってのことであろうか、娘とはいっつき離れて生活したという<sup>18)</sup>。

正規の信徒（第一群信徒）には、神の召命と恵みに浴し、かつその明確なしるしが認められるという。またそうでないかぎり洗礼と聖餐は拝受させないか、少なくとも留保される<sup>19)</sup>。そしてこのことがラバディスト教団を再洗礼派と同類視させ、異端者組織として迫害や攻撃を招く余地をつくった。ラバディはこれに反論する。「しかしながら原始教会が洗礼をしばしば成人するまで延期するようなことをしただけでなく、霊の再生のしるしとほんとうの意味での新生のあかしが十分に見て取れるときが来るまで猶予したのは不当な措置ではなかった。」この方式を認めてならないいわれがあるか。いや、これを非難すべき合理的な根拠などどこにもない。危険も懸念もありえない<sup>20)</sup>。霊的再生のしるしが認められない幼児への洗礼は誤りであるが、再洗礼を容認する理由はない。成人した不信心者に再度の洗礼は無意味であり、信心ある人なら幼児洗礼がそのまま有効なのだから<sup>21)</sup>。同様に、「聖餐を拝受せしめることが神意にかなう (fas esse)」人とは要するに「教会の真の成員 (vera Ecclesiae membra)」すなわち第一群信徒であるから、ここにも排除と選別、少なくとも延期の原則がはたらいている<sup>22)</sup>。

ラバディストは聖書観においても手厳しい批判を受けた<sup>23)</sup>。彼らは聖書の絶対的權威を認めることにやぶさかではない。「われわれはつぎのように告白し信ずる。神のことは、ないし聖書（それは神の霊によって書かれたものであり、信者が神の御心にかない、イエス・キリストのとりなしにより神と結ばれるために知っておくべきことがそこにはすべて書かれていることを、われわれは心より真実だと認める）は教会にとって、あたかも信仰と指導と道徳における唯一無二の規矩である。すべては聖書にかんがみて吟味、考慮され、陶冶され、形の崩れたものは形を整えられねばならない。」<sup>24)</sup>しかし「聖書なる書物は神そのものではない (S. S. Scripturae Liber DEUS ipse non est)」これが永劫より永劫にわたって存在するものでないのは、神の御手の作にしてかつ聖霊の作であるからだ。限りある作品と限りなき創造者との隔たりはいかばかりであろう。されば聖なる書の神より隔たること推し量るべし。それゆえ聖書をあたかも神のごとくにみなし、神にこそふさわしいものを書き帰してはばからぬ者は重罪人

である。聖書には聖書にふさわしい名誉がある。どの宗教も聖なる書なしには成り立たない。しかしそのような書物が存在しなければ確実なものがない、神に由来するもの (divina) もないと考えるのは行き過ぎである。現にこの書なしに信仰は長く行われていたのである。天上においては聖書のあるなしにかかわらず宗教は完璧無比であろう。神と天の宗教は総じて神自身によって成り立つ。そもそも「神が信仰の維持あるいはむしろ啓示のために用いたまうものはなんであれ手段、道具にすぎない (quæcunque ille ad ejus conservationem vel manifestationem adhibet, media sunt tantum atque instrumenta)」(p. 222 seq.)。聖書機関説とでも称するべきであろうか。

マリア・ジビュラが復縁を懇願する夫を断固として退け離婚にいたったこととラバディスト教団の婚姻観とのあいだにはなんらかの関係があるのだろうか。メーリアンはディッテルバハが「コリント前書」7を根拠にその冷淡な態度をいさめたのに承服しなかった。パウロはそもそも結婚はせぬがよいと言う。しかし性欲の横暴を回避するにはいっそ結婚するのがよく、ひとたび夫婦となったからには離縁してはならず、信仰の違いも離縁を正当化することはできないと述べる。「また女に不信者なる夫ありて偕に居ることを可しとせば、之を去るな。そは不信者なる夫は妻によりて潔くなり、不信者なる妻は夫によりて潔くなりたればなり。」パウロを金科玉条とするかぎり、メーリアンに夫を拒む理由はない。しかしメーリアンはイヴォンの教えのほうを優先すると言い張った。

『真理の番人』は教団が信徒に結婚を禁じているという世人の中傷に反論し、独身を守るのが最善とはいえ、「結婚そのものは神聖なものとみであり、あまたの至聖のわざを映すのにふさわしく……すべてのキリスト教徒の尊ぶところであって、当人の立場や条件とは無関係であり、だれの心にもかなうのである。われわれはもつとも純粹無垢な人が結婚生活を送っているものだ」と認識している」という<sup>25)</sup>。教団が、「キリスト教徒が神のうながしに従って結婚生活に入ることを禁止する」ことなどありえない。ただし、婚姻の締結が主の御名において行われ、主の召命の結果でなくてはならないとすれば、「欲望と罪の精神」「自己愛と神以外の存在にたいする愛と」に導かれる結婚は禁止される。「なぜならいかなる愛も、それが神にありて神に服し、神への愛にもとづいて行われるのでなければ許されないからである。また、おのが肉体(その四肢はイエス・キリストのもの)を罪と情欲の道具……にし、パウロによれば、信者がつねに……神の栄光をたたえる義務を負う場であり方法である聖霊の生きた神殿」すなわち人間という存在を冒瀆することが神意にもとる不正であることを忘れてはならない。「これと異なる道を進むなら、あらまほしきイエス・キリストとその教会との結合を体現しないばかりか、さらには聖パウロのゆるぎない神学にならい、夫婦が全生涯をつうじてあたうかぎりその身に映し出すべき」夫婦の尊厳にもふさわしくない<sup>26)</sup>。信仰が当の婚姻の本質をなす以上、「信仰

の神聖を汚す」婚姻、つまり信仰を異にする婚姻は禁じられる (p. 153)。夫婦といえども婚姻を肉欲の解消に使ってはならず、禁欲を保たねばならない (p. 154 seqq.)。

この点でラバディストの見解は「コリント前書」と完全には一致しない。このことはさしあたり三つのことを想起させる。第一は、独身を最善とし、夫婦は節制をむねとするという原則を、やがてラバディスト自身が守らなくなったことである<sup>27)</sup>。第二は聖書からの逸脱という問題で、これについては後述する。第三は、メリアンの夫を拒む理由がラバディストの婚姻観とかならずしも結びつかないことである。教団がグラフの入信を拒否せず、夫婦が禁欲を守るという条件のみたされる可能性は残るからである。まして、禁欲の原則はすでに教団内でなし崩しに守られなくなっていたのではないか。夫が近くに住むことはできないかと問い、妻も子もそれを拒絶したのは、夫との家庭生活を回復する意思が妻子の側になかったからにすぎない。いやむしろメリアンが復縁を拒否するのに「コリント前書」のラバディスト（メリアンはイヴォンの名をあげる）の解釈を正確に引き合いに出している点が注目される。メリアンはラバディストの思想を、少なくともその骨子においてかなりよく理解していたのである。

聖書からの逸脱について付言するなら、ラバディストはそのような事態を容認していた。教団攻撃の根拠の一つはここにもある。霊的生活と実生活とにおいて、神にたいする畏敬・礼拝・信仰・愛は、「選ばれた人々に聖書がなければ伝えられないほど聖書という書物と不可分に結びついてはいない」。キリスト教の黎明期に神が聖書の支えなしに異教徒の大多数を回心させられたのだとすれば、神が「今日なおそれをなしうることは明白である」<sup>28)</sup>。さらにまた「聖書 (Sacer Codex) が神の真理を認識させるとしても、それはやはり真理そのものではない (tamen non est ipsa veritas)。神とイエス・キリストこそ真理である」 (p. 224)。そして神の道具としての聖書は昔も今も絶対不可欠なものではない (p. 227)。そもそも無限の神の真理は「なんらかの限定された枠、限界線のなかには収まりきらない (finitis quibusdam terminis & limitibus circumcludi non possunt)」 (p. 231)。とすれば、説教はときに聖書を逸脱しうるのである。しかしそうはいっても、ラバディやイヴォンの語る「神の真理 (divina veritas)」である保証はどこにあるのかといえ、啓示する神と、神の真理を人の心に刻みつける神の霊のはたらきにある (p. 233)。これを身に授かるのも神の恵みと召命のあかしにほかならない。

さて、ラバディとラバディストの主張のうち、上述の諸点とならんでわけても力説されるのは「自己否定」の義務である<sup>29)</sup>。ラバディは言う、世の墮落、罪、危険を知り、憎み、逃れよ。社交・華美・虚栄・娯楽・取引と絶縁せよ。公職・財産・名誉・遊興を捨て、俗界の不浄に染まるな、俗界の性愛を嫌悪せよ<sup>30)</sup>。精神的なものも否定の対象となる。知のはたらきは頭のなかに拡がると神の代わりになろうとする。快樂は偶像になりかねない。神の欲したまうものだ

けを欲するのでなければならぬのであるから、総じて欲求には恬澹たれ。自己愛を捨て、おのれの利害から離れよ (S. 117-120)。なぜならすべての存在は神より出でて神を求め、ふたたび神のもとに帰り合一しなければならぬからである<sup>31)</sup>。いや、そもそも初めは無垢であった自己 (S. 11) も、やがて俗界に縛られるにいたった。人は「自分自身を神から盗み取っておきながら、なおすべてのものをわが手中に収めようとは考えても、自分を神に差し出そうとはしない」(S. 23)。神に離叛した自己は神意にそぐわぬ我欲となり、自己を神とみなして神に反逆するという最悪の過ちを犯す (S. 26-29)。自己と自己愛こそあらゆる罪の源泉なのである (S. 47)。自己を抹殺し圧伏するための戦いを始めようではないか (S. 49)<sup>32)</sup>。

ただし、神に離叛した邪悪な自己、見捨てられた自己中心主義者、快樂主義者は永遠の罪びとであって、神の恵みにあずかることはできない (S. 50-52 u. 62 f.)。

他方、神から離れ俗界の欲望にうつつを抜かしていても、イエスの恵みによって老アダム (聖書にいう「<sup>ふる</sup>旧き人」) を殺し、新たな霊的人間としてよみがえる資格を与えられる「選ばれた人」というものがある (S. 64 ff.)。ラバディはこれを神によって「恢復されうる (ergänzzbar)」人と呼ぶが、それはどのようにして選ばれるのか。「選ばれた人の自己のほうが、悪習と悪行とを重ねた者よりも容易に恢復されるのは、重い熱病が軽い病人より治しにくいと同じ理窟である」(S. 70)、つまり我執我欲の大小によるというのだが、これに続けて、「恢復はおしなべて全能の神の慈悲によって成し遂げられるとはいえ、ときとして大罪人のほうが軽い罪人よりも早く回心させられることがある。これは病気の場合にもあることだが、そこに一般的法則はない」と述べて (S. 69 u. 71)、ふたたびあのあいまいな銓衡基準へ戻っていくのである。

神に選び出され、自己否定の闘争を神とイエスの恵みを糧に戦い抜けば、俗界の<sup>ひとや</sup>獄になじんだ自己は恢復されて解脱し、自然の自己は自然を超越し、肉の自己は霊性と恩寵と聖性の自己としてよみがえる。それは永遠の命と浄福とを授かるのにふさわしい人間である (S. 73 f.)。すなわち第一群信徒である。

自己愛という腫瘍、欲望という痛、罪深い自己という壊疽は、切除したり焼いたりする強引な方法を使わなければ治らない (S. 107)。これを治しうるのは神のみであり、そのために医師として来られたイエス・キリストが唯一の正しい薬を処方された。それが福音書で、別名を自己否定とも自己拒絶ともいう (S. 107 f.)。ここに罪なき自己とその再建への道が始まる<sup>33)</sup>。その処方の第二「自分自身を否定すること」には、自己否定の実践される様子が「目に見え」「行動で示され」るべきだと説かれ (S. 127 f. u. 139)、世俗裁判所で正式書類を作成するように、真の回心、神への服従、自己否定のために儀式をとり行い、その意思を確証する文書に証印するのは有益であると述べられているが (S. 130)、自己否定の実を示し、その記録証書を作成するという提案が、すでに始まっていた教団設立への努力との関係からいわれているのは明ら

かである。俗界で心にかかっているものはすべて捨てる。そこに財産・職業・肩書・名誉などが含まれることはすでに見たとおりである<sup>34)</sup>。

地上の一切のものから身を引き離すことは神意であるが、その実行がとりわけ強く要請されるのは、第一に上述のものがつまずきの原因となり、神とイエスにならう生きかたを妨げている場合、第二に自己否定が神の命令であるとき、そして第三に、教会とその信者がそれらのものを必要とする、もしくは信仰を護持し福音書の教えを実践するうえでそのことが義務づけられる場合である。とりわけ、有能な人物の下に秩序あるキリスト教団を組織する機会にはその実行がなおさら強く要請される。そのとき物心両面ですべてのものを放棄せよとの召命が下るからだ、トラバディは説く<sup>35)</sup>。そして放棄されるものの中には俗界で築かれた財産が含まれる。財産は信仰上と教団運営上との二つの意味で放棄され、教団へ吸収される。これがロックの苦言を呈した財産共有制にほかならない<sup>36)</sup>。これは一種の原理主義である。イエスの弟子とならんがためには己を捨てよ、肉親も家も生命も捨てよ、「幸福なるかな、貧しき者よ、神の国は汝らの有なり」(ルカ 6, 20) ——この教えをすべてではないにせよ実践するのはキリスト教徒の義務である。その生活は自己愛を打破する霊的戦争であり、その目的は「旧き人」を殺して生まれ変わることである。自己否定とキリスト教的殺人は必然のことである。「ルカ伝」はまさしくこの普遍的義務と不可欠な規範とを語る。これに例外を設けるべき口実はない。そうすれば人は「善き神聖なる自己」としてよみがえり、神、自己の内なるイエス、そして自己を導く聖霊と一体になる<sup>37)</sup>。このような信仰実践を進めるうえで師の助けは有効であり<sup>38)</sup>、神の召命を受けたうへは、「われわれ」のもとに身を寄せる権利と機会とをみすみす手放してはならない<sup>39)</sup>ともトラバディは言って、自己否定の義務の遂行を教団に結びつける。

他方、財産の共有が正しい制度だとみなされるのはなぜか。財産は個々人のものではなく、すべて神のものだからである。「すべての信者がみずから所有する財産をすべて神のものだと認識し、自分の心身と同じように、神を自分たちの所有者であり絶対の主人であるかのように敬うことは、正当であるどころか必然である。……信者は自分自身をあたかも神の執事か財産管理人に定められた者のようにみなさねばならない。なにごとであれパウロのうべなうごとく、神のみの利益と栄光とを旨ざして財産を神に差し出すために。」<sup>40)</sup>

このように財産の共有は信仰の視点から正当化される。「一方、信者はだれしも自分自身をあたかもイエス・キリストの体の一部のごとくにみなさねばならないのであるから、自分の所有物すなわち富はこれをすべて差し出す用意ができていなければならない。その体と四肢とに必要に応じて仕えるためである。なぜなら当の体の四肢にとって、可能な限り、そこにいれどどこからでも、一方が他方を助けに行くのは不可欠なことだからである」(p. 160)。キリストの四肢たる信者から差し出されて共有となった教団の財産は、キリストの体(教会ないし教団)

と四肢（信徒）のために使われる。

さて、1647年に生まれたメーリアンは戦後世代に属する。しかし二代目マテウス・メーリアンの活写するとおり、ドイツは「法と正義が地に墮ちはてて」、「暴力と無法が水面を漂う」惨状を呈していた。「都市も城館も、町も村も家も焼け落ち、灰燼に帰した。人は家屋敷から、親は子から、子は親から引き離されて、貧窮のただなかへ追いやられた。貧乏人は手段を選ばずいじめ抜かれ、拷問され、車輪刑に処せられ、引き裂かれ、ねじ上げられた。幾千もの人が首をはねられ、虐殺され、のこぎりで切り刻まれ、刺し殺され、撃ち殺され、溺殺され、焼き殺され、酔った勢いで絞め殺された。ほかにもまだ残忍な、野蛮というもおろかなやりかたで命を取られる者もあった。幾百という都市、いや幾千もの町と村が痛ましい荒廃を閲し、人氣がなくなり消滅したので、人はいうに及ばず一匹の犬さえそこに棲むことも隠れることもできぬありさまであった。」土地は放棄され、麦畑も果樹園も今はイバラと藪に覆われ、「そこに見えるものは花にあらず、死んだ馬の骨、骸骨」、腐肉にたかる黒いハゲワシとカラス、襲い来る疫病。人は「歯をむき出しにした非情な黒い空腹」に支配されていたためなんでも口にした。死んだ馬でも落ちていた腐肉でも、その一片を「甘露と思う者」さえいた<sup>41)</sup>。おそらく一所不住のラバディも、ワルタ館を目ざすメーリアン一行もこうした光景を目撃したであろう。

他方、1568年以來の独立戦争はネーデルラントにむしろ経済的、文化的繁栄をもたらした。市民には自由と自主独立の氣風がみなぎっていた。ネーデルラントの文化、風俗、流行は今やヨーロッパの中心である<sup>42)</sup>。博物学・本草学ではオランダ語がラテン語とならんでもっとも主要な言語となり、メーリアンがドイツにいたころはレンブラントもフェルメールもまだ生きていた。フェルメールのモデルを務め、その遺産管理にあたった博物学者レーウエンフクとはやがて知己になる<sup>43)</sup>。画業と本草学とを究めるうえでネーデルラント行きが結果として人生の賢明な選択肢であったのは明らかである。しかし目的地はフリースラントの小村を拠点に活動する小教団であって、そこでの暮らしがメーリアンの志にかなうかどうかは試してみなければわからない。信徒は質素ながらも和氣藹々と、自由闊達に、助け合いながら集団生活を送っていたのか<sup>44)</sup>、それとも、ジョン・ロックを困惑させた閉鎖的空間に才能はうずもれ、厳格な規律と懲罰に戦々兢兢としていたのか<sup>45)</sup>、いずれにもせよメーリアンは足かけ6年をここで過ごしたのである。この歳月をメーリアンの生涯における間狂言にすぎなかったとみるか<sup>46)</sup>、人生と職業生活における有意義な転機だと評価するか<sup>47)</sup>、これもまた結果にすぎない。入信の翌年には気のおけない義兄カスバルが、1690年には母が他界する<sup>48)</sup>。義兄が鬼籍に入り、夫が訪ねてきた1686年、ラバディストはスリナムの植民・布教事業から撤退し始める。ワルタ館の当主であったスリナム総督ソンメルスデイクが手兵に殺害された事件（1688年）は教団の弱体化を加速させた。かつてはスリナム渡りの珍しい動植物におそらく胸をときめかしたであろうメーリ

アンの眼前で醜態が演じられる。奴隷の暴力的使役、熱帯雨林の恐怖、布教の失敗が話題となり、教団幹部は追い討ちをかけるように敗北感と疲労に悄然とする宣教師たちを罵倒した<sup>49)</sup>。

義兄と母の申いをすませると、長女には婚約者ができていた。教団生活への熱意も急速にさめていき、いささか身軽になったメーリアンは二人の娘とアムステルダムに移った。

ウィーヴェルト行きは夫と別れるためだったというのが大方の意見である<sup>50)</sup>。夫との妥協しがたい宗教観の違いにその動機をみる研究者もいる<sup>51)</sup>。しかし夫を遠ざけるためにわざわざフリースラントまで逃げたのではあるまい。あときフランクフルトの市民権を更新したのは、いずれまたここに住みたい、それでも離別は可能だと考えていたからであろう。ならばそのままフランクフルトに住み続けるという選択肢もあったはずだ。

夫の画家としての力量と生活能力のほどはすでにメーリアンの目に明らかであったと思われる<sup>52)</sup>。家計は遠からず破綻するのではないか。三冊目の「芋虫の書」が可能だとして、それは家計を助けるだろうか。自分の画才は伸びるだろうか。売れる絵のために新しい画法を採用するにはどんな勉強をすればいいのか。絵の市場に目を向けるなら、画家条例と同職組合の慣行も、古くから行われてきた職人修業の伝統も、女性画家の活動に制約を設けていた<sup>53)</sup>。メーリアンは画業の将来展望と世を渡る<sup>たつき</sup>方便との悩みにくわえ、寡婦となった母の扶養という重荷を背負わねばならなかった。メーリアンがラバディとラバディストの教義をどの程度知っていたか、またそれらのどのような教えに同意あるいは共鳴していたか、どのような点に違和感を覚えあるいは不同意であったか、本人は何も語らない。ところで、あまりにも不幸な時代を果てしなく生きねばならなかった近世人の第一の関心事は、生き残ること、生き延びることであったが、戦後の第一世代に属するメーリアンにもそれは引き継がれていたであろう。いま知りうる当時のメーリアンの苦境とラバディストの主要な教えとからひとまず結論を導くとすれば、メーリアンは宗教的意匠をまとった財産共有制に救いを見出した。義兄の助言とネーデルラントの繁栄、夫との疎遠な関係にさえ後押しされて、当座の生活を成り立たせるべくひとまずウィーヴェルトに落ち着くのは賢明な判断だった。それはふたたび祖国へ帰ることのない旅となった。しかしメーリアンは新天地での数年をいくらか余裕をもって生き延びたのである。彼女がワルタ館を出てから教団が分裂解消するまで長くはかからなかった。

## 注

- 1) Maria Sibylla Merian, *Neues Blumenbuch*. Mit einem Nachwort v. Thomas Bürger, München, Berlin, London, New York 1999. Neuaufl. 2010, S. 81. 「物語る erzählen」ことには危険がつきまとい、メーリアン研究を混乱させてきた。文献表に「小説」が紛れ込み、研究に空想が密輸入された。空想はときにメーリアンの沈黙を埋めるのに役立ったが、確かな証拠のある「事実」なの

か思いつきにすぎないのかを見極めるのはしばしば困難である。

- 2) 日本人にはなじみのハルマ (François Halma, *Tooneel der Vereenigde Nederlanden, en onderhorige Landschappen* [ ... ]. Tweede Deel. Leewarden 1725, S. 317) によると、かつては一目おかれていたウィーヴェルトも今や180戸を数えるにすぎない小村となり、四つの貴族の城館は見る影もない廃墟である。唯一現存するラティン館は長く悪名高いワルター族の所有であった (これがラバディスト教団のあったワルタ館である)。村の名を高めたのはこの館に住んだラバディスト派の才人アンナ・マリーア・ファン・シュールマンその人である。——メーリアン時代の信徒数は350名ほど、最盛期には500名を超えたという (Boris Friedewald, *Maria Sibylla Merians Reise zu den Schmetterlingen*, München 2015, S. 58)。ワルタ館については Heinrich Heppe, *Geschichte des Pietismus und der Mystik in der reformirten Kirche, namentlich der Niederlande*, Leiden 1879, S. 347-351に詳しく述べられている。
- 3) デイッテルバハ『ラバディストたちの落滅』が唯一の証言である。Petrus Dittelbach, *Verval en Val der Labadisten, of Derselver Leydinge, en wyse van doen in haare Huys-houdinge* [ ... ], Amsterdam 1692, S. 18 f. なお、メーリアンはデイッテルバハについてラテン語を学んだ (*Neues Blumenbuch*. Nachdruck der Ausg. Nürnberg 1680. Begleittext v. Helmut Deckert, Leipzig 1968, S. 121)。
- 4) グラフは1694年にアンナ・マリーア・ホフマンと再婚し、1701年12月に他界した。
- 5) Dieter Kühn, *Frau Merian ! Eine Lebensgeschichte*, Frankfurt a. M. 2002, S. 259 u. 268 f.
- 6) 母の扶養は焦眉の急であった。二度目の寡婦となった母は50代半ばで、工房を構えるのに必要な三度目の結婚はむずかしくなりつつあった。初代マテウス・メーリアンの跡継ぎである二代目メーリアンは『ヨーロッパ世界 *Theatrum Europaeum*』(全21巻) など父の事業を引き継いだ、実入りのいい貴族相手の出張画業に熱を入れていた。その自伝 (Selbstbiographie des jüngeren Matthäus Merian. Veröffentlicht v. Rudolf Wackernagel. In: *Basler Jahrbuch 1895*, hg. v. Albert Burchardt, Rudolf Wackernagel u. Albert Gebler, Basel 1895, S. 227-244, hier: S. 239) に、義母の再婚相手ヤーコブ・マレルは「小男」だと書いている。これは背丈のことなのか人物評価なのか判然としないが、マレルにほとんど言及していないのが二代目の値踏みを示唆している。ただしマレルはおもに静物画家としてけっして凡手ではない (Kühn, *op. cit.* 21)。初代の再婚、その義母の再度の結婚を二代目が快く思わなかったというのは、当時の組合制度を無視した現代人の思い込みである。カイザー (Helmut Kaiser, *Maria Sibylla Merian. Eine Biographie*. 2. Aufl. München 2002, S. 20 f.) はこの自伝を根拠に、義母は絵に描いたような継母であった、人間らしい温かみに欠け厳しいばかりで、藝術の才能をみる目がなかったなどと書いているが、空想が過ぎるというものである。夫の両親の扶養問題は伝統的に行われていた隠居契約によって解決されるが、妻の側についてはなんら取決めがなかった。
- 7) 義兄カスパーはくりかえしマリーア・ジビュラに入信を勧め、教団もみずから勧誘したとしばしば主張されてきた。それどころか、このはたらきかけが冷えきった夫婦関係にますます水を差したと断定する人さえいる (Kim Todd, *Chrysalis. Maria Sibylla Merian and the Secrets of Metamorphosis*, Orland, Austin, New York, San Diego, London 1970. 1st Harvest ed. 2007, S. 90)。中野京子は

『情熱の女流「昆虫画家」メーリアン波乱万丈の生涯』講談社（2002年）に、「この世に見切りをつけて隠遁生活に入っていた」カスパルが、「辛ければここへおいで」と義妹を誘ったとまで書いている。このようなカスパル書簡の存在と、彼を世捨て人同然にみなしうる根拠とをわたしは見出しえなかった。カスパルがメーリアンにラバディの著作を送った可能性はあるというデイヴィス（Natalie Zemon Davis, *Women on the Margins. Three seventeenth-century lives*, Cambridge, London 1995. Hier zit. nach: Natalie Zemon Davis, *Metamorphosen. Das Leben der Maria Sibylla Merian*. Aus d. Amerikanischen v. Wolfgang Kaiser [Wagenbachs Taschenbuch 484], Berlin 2003, S. 44）の控えめな推定に同意するととどめたい。Kühn, *op. cit.* 310 はマリーア・ジビュラをラバディストに引き寄せたのはバロック時代以来の無常観、虚無感だったのだろうかと述べるが、彼女がラバディの思想のどのような側面に共鳴したかについては断定を避けている（S. 313）。

- 8) トッドは夫婦の信仰上の不一致を力説し、性生活の困難までも執拗に解説したうえで、メーリアンのネーデルラント行きを必然性を結論づける（Todd, *op. cit.* 89-93）。さらに、そもそも二人の結婚は母が望んだことかもしれず、メーリアンは（母の希望を容れて）そのとおりにしたのだと、この結婚がさも特殊な事例であり、かつメーリアンには不本意であったかのように書いている（S. 89）。中野は夫の品行を徹底的に糾弾する。夫はのらくら者で仕事への情熱を失い、酒と煙草に溺れている。親方にもなれそうにない。なにより夫が女をつくったのには「我慢ならない」（前掲書104ページ）。夫の不倫はありそうな話である。酒も煙草もたしなむか溺れるかした可能性もあろう。しかしこうした日常生活の細部についてこうと断定しうる証拠はあるのだろうか。中野のあげる8点の参考文献中、夫の女遊びに根拠を示さず言及するのはCharlotte Kerner, *Seidenraupe, Dschungelblüte. Die Lebensgeschichte der Maria Sibylla Merian* [Gulliver Taschenbuch 778], Weinheim u. Basel <sup>2</sup>1998, S. 70 である。グラフの素行を問題視する向きは当時からあった。「学界新報」が、メーリアンはグラフと結婚したものの、グラフは「恥じるべき悪徳ゆえに国外逃亡を余儀なくされた」と報じているからである。しかし同紙はのちにこれを誤報と認め、「この夫に20年も連れ添ったあのメーリアンのほうが、むしろ二人の娘を連れてオランダへ行き、ラバディストに加わった」、この名誉ある男の名は今もニュルンベルクに残っていると訂正記事を掲載し、彼の復縁への努力と離婚手続の経緯、再婚のことを伝え、真実こそわれわれの唯一の関心事であると注記している（*Neue Zeitungen von Gelehrten Sachen, auf das Jahr MDCCXVII. 1. Theil. Oder Gesammelte Nachrichten [ ... ]*. Leipzig. No. XXIII [20. Mertz], S. 178 u. No. XCV [27. Nov.], S. 767 f.）。ダンカン（James Duncan, *Memoir of Maria Sibilla Merian*. In: J. Duncan, *The Natural History of British Moths, Sphinxes, etc.* Edinburgh 1836, S. 20 f.）がグラフの醜聞と国外逃亡に言及しているのはこの記事をうのみにしたからであろう。グラフがギルドに所属する親方であったかについては、これを支持する根拠とそうではなかったと推測される状況証拠とを詳しく述べている Kühn, *op. cit.* 242-243 を参照されたい。
- 9) „aus einer besondern Caprice“: Johann Gabriel Doppelmayr, *Historische Nachricht von den Nürnbergischen Mathematicis und Künstlern [ ... ]*, Nürnberg 1730, S. 269; vgl. auch *ib.* S. 255.
- 10) 「改宗」の詳細は確認できなかった。樺山紘一『ヨーロッパ文明の曙 描かれたオランダ黄金世紀』〔諸文明の起源10〕京都大学学術出版会 2015年（271ページ）は、「はじめメーリアンはイエ

ズス会に関わり、ここを脱退したのちは、プロテスタント集団の「ラバディスト会」に加入したと書いているが、文献を誤読したものであろう。樺山の記述にたいするこれ以外の疑問にはここでは触れない。

- 11) Jean de Labadie, *Manuel de Piété, Contenant quelques Devoirs & Actes Religieux & Chrétiens vers Dieu*. [ ... ] Middelburg 1668. ただしメリアン囑目の独訳版がどれであったかはわからないという (Kühn, *op. cit.* 313)。ここではメリアン没後に刊行されたテルステーゲン訳を用いる (Jean de Labadie, *Hand-Büchlein der wahren Gottseligkeit/ begreifend Unterschiedliche Gottselige Pflichten und Grund-Regulen des wahren Christenthums* [ ... ]. [Dt. v. Gerhard Tersteegen.] Nachdruck der Ausg. Frankfurt u. Leipzig 1727. Köln 1997)。
- 12) 神意に従うという目標は行いと心との両面から達成される。前者は、神意、神のことば (とりわけ福音書と「ロマ書」「ガラテア書」からの引用が多い)、予定に従うことを、後者は神の霊との合一 (神秘的合一) を意味する。神のみを見つめ、祈りと霊操とを重ねておのが精神を高めるなら、神の霊に触れることができようというのである (S. 122)。ラバディはこれを „mystique union“ と表現するが、神秘主義における „unio mystica“ にほかならない。はたしてラバディへの神秘主義の影響は著作の随所に見て取れる (s. S. 135-139)。たとえば根本原則九 (S. 139-146) ではマイスター・エックハルトとの類似を指摘しておきたい。また、神秘的合一にともなう感情表現はマクデブルクのメヒティルトかと思まがうほどである (たとえば S. 168, 170 や、「神の不在」に言及する S. 184 f. など)。
- 13) Pierre Yvon, *Korte Onderrichtinge Rakende den Staat en de Maniere van Leven der Persoonen, die God t'samen vergadert* [ ... ], Amsterdam 1675. ここではその独訳 Kurtzer Bericht vom Zustand und Ordnungen der jenigen Personen/ welche Gott versamlet/ und zu seinem Dienst vereinigt hat/ durch das Ampt seines treuen Knechts [ ... ]. In: Martin Meyer, *Philemeri Irenici Elisii Diarium Europaeum* [ ... ], 30. Theil, 2. Theil, Frankfurt a. M. 1675, S. 353-368を用いる。
- 14) Lord King, *The Life and Letters of John Locke, with Extracts from his Journals and Common-Place Books*. New ed. London 1858, S. 162 f.
- 15) ロックの数年前、1677年にここを訪ねたクエーカー教徒ウィリアム・ペンはイヴォンの鄭重な出迎えを受け、館内へ招き入れられて、イヴォンをはじめ主だった信徒と意見を交わただけでなく、最初は断られたシュールマンとの面談もその居室でかなえられた。ペンは彼女について60を超えていると書いているが、実際は70の手前で、この翌年他界する。ロックとの待遇の差は信仰の隔たりを意味するのであろう。ペンは信徒と語るうちに宗教的感化を受けたらしく、信徒らに神の召命があったのに相違はあるまいと言い、分離主義だという世のそしりはむしろ諸君を尊敬する理由だと弁護した。さて、辞去するときには、歩行ままならぬシュールマンを除き全員が門口まで見送ってくれたが、その際ペンはわざわざ説教めいたことを言い残した。神霊に始まり肉に終わるような人間にはなりたまうな、キリストのあとに続け、父なる神より授けられたものを糧とする巡礼者たれ、とこしえに神とともにあれ。先師ラバディの遺訓と感謝の念と活きいきとした思い出を大事に守っているのは「まじめで率直な人々である。クエーカーにも似て、集會に

あつては静粛を保ち、女性が発言し、伝道は聖霊の導きに従い、服装と館内の家具調度は質素である」。このような信徒たちへの言わずもがなとも思える助言と感想を書かせたのは、教団内の規律の変化とイヴォンへの過剰な尊崇の気配を感じ取ったペンの慧眼である。*Journal of Willam Penn, while Visiting Holland and Germany, in 1677*, Philadelphia 1878, S. 116-127. ロックとともに、これは当時の教団の空気を伝える貴重な記録である。

- 16) Pierre Yvon, *Essentia Religionis Christianæ Patefacta seu Doctrina Genuina ac plena Fœderum omnium Dei* [ ... ], Hamburg 1673, S. 100.
- 17) 教団の閉鎖性それ自体がカトリック、プロテスタント双方の疑惑を招いた長い経緯は、ラバディとラバディスト集団にたいする誹謗、攻撃、迫害の歴史に明らかである。ただしラバディは、ヘルフォルトを追われたあと滞在したハンブルク近郊アルトナで1674年に没したので、世間との接触を保ち続けたことになる。ラバディは人気と迫害の波のなかでしだいに分離主義へ傾いていったと考えられる。イヴォンのラバディ伝（ラバディの出自からシュールマンとの邂逅までと、シュールマンの詳しい紹介）は、ラバディの思想遍歴と思想の眼目、さらには教会生活と日常生活の道徳的腐敗を容赦なく糾弾する雄弁な説教とその人気、教皇派・イエズス会・ルター派・改革派による活動妨害の詳細な記録である。Kürtzliche und aufrichtige vorstellung des lebens und verhaltens, wie auch der wahren meynung des weyland Herrn von Labadie; von dessen Secte Th. II. B. XVII. c. XXI gehandelt worden. In: Gottfried Arnold, *Unpartheyische Kirchen- und Ketzer-Historie, vom Anfang des Neuen Testaments biß auf das Jahr 1688.* [ ... ] 2. Bd. [Neue Aufl.] Schaffhausen 1741 [erst 1700], S. 984-1029. この伝記がイヴォンの執筆であることはサクスビー (Trevor John Saxby, *The Quest for the New Jerusalem, Jean de Labadie and the Labadists, 1610-1744* [Archives Internationales d'Histoire des Idees 115], Dordrecht, Boston, Lancaster 1987, S. 453) によるが、確認できなかった。また、アルノルトの「新しいラバディストについて」(Gottfried Arnold, *op. cit.* 307-319) と、ヘッペの「ジャン・ド・ラバディとラバディストの神秘思想」(Heinrich Heppe, *op. cit.* [s. Anm. 2] 241-374) は、ラバディと教団の思想の概観としてすぐれ、以下の記述に役立った。ラバディとラバディストが教会外で説教や礼拝あるいは集会を行い、しだいに秘密結社めいた性格を強め、それが反教会制度・反共同体の謀議を邪推させて、迫害の原因をつくったことを証明する文書に、神聖ローマ皇帝レーオポルト一世の勅旨がある (Der Römischen Käyserl. Majestät Ernstliches Edict an die Aebtißin zu Herfordt [ ... ]. In: *Der Römischen Käyserlichen Mejestät Und Des Heil. Röm. Reichs Geist- und Weltlicher Stände/ Reichs-Abschiede und Constitutiones desgleichen Königliche/ Chur- und Fürstliche absonderliche Edicta* [ ... ], s. I. 1702)。ラバディはボルドー近郊に生まれ、イエズス会を離れてより、聖職者として、フランス、スイス、ネーデルラント、ドイツを、保護者を訪ね歩くように転々とした。シュールマンの仲介で1670年にヘルフォルトへ行き、プアルツ選帝侯息女にして当地女子大修道院長エリーザベトの庇護を受けた。デカルトの高弟であり、ヘルフォルトの文化振興に尽力した美徳の誉れ高い人物である。皇帝はラバディ、イヴォンらを名指しして、「再洗礼派と新興の狂信者、分派主義者……その他の危険かつ不穏なやからを当司教領より追放」せよとエリーザベトに命じた (1671年10月30日付)。ここにはラバディストの秘密集会和謀議にたいする警戒感がよく

現れている。

- 18) Helmut Kaiser, *op. cit.* (s. Anm. 6) 122. メーリアンの母の居室については触れられていない。
- 19) ルターがサクラメントを洗礼と聖餐に限定したのを受け継いだものだと思われる。
- 20) Jean de Labadie, Pierre Yvon et Pierre du Lignon, *Veritas sui Vindex seu Solemnis Fidei Declaratio*. [ ... ] Herford 1672, p. 136 seq. 教団の信条書、宗教的マニフェストとして重要な文書である。
- 21) Gottfried Arnold, *op. cit.* 313 による。
- 22) *Veritas sui Vindex* (s. Anm. 20), p. 143 seq.
- 23) Vgl. Johann Michael Mehling, *Historisches Kirchen- und Ketzer-Lexicon*. Chemnitz 1758, 2. Bd., S. 42 f.; Ch. Gotthold Neudecker, *Allgemeines Lexicon der Religions- u. christlichen Kirchengeschichte für alle Confessionen*. [ ... ] Weimar u. Ilmenau 1835, 3. Bd., S. 4-6.
- 24) *Veritas sui Vindex*, p. 97.
- 25) *Ib.* p. 148.
- 26) *Ib.* p. 149 seq.
- 27) シュールマンの親友であったカタリーネ・マルティーニの妊娠に端を発した。「なお悪いことに」その相手はイヴォンであったという (Saxby, *op. cit.* 212-213)。
- 28) *Veritas sui Vindex*, p. 223 seq.
- 29) 聖書と関連させてラバディなどが要請する「自己否定」については以下に略述するが、「マタイ伝」16, 24「爰こゝにイエス弟子たちに言ひたまふ『人もし我に従ひ来らんと思はば、己おのをすて、己が十字架を負ひて、我に従へ……』」における sich verleugnen のもっとも簡明な Trübner VII, 491 の語釈を引いておく。„er verzichte auf alles, was ihm an der Welt behagt.“ Vgl. auch Adelung IV, 1079; Grimm XII/I, 749. それゆえ「自己否定」は適訳とはいえないが、簡潔に言い表さんがための便法である。禅宗にならい「自己放下」というべきか。なお、イエスの「自己否定」の教えはここ以外にもある (Mk 8, 34; Lk 9, 23; 14, 25-27; 18, 29 f.)。
- 30) Labadie, *Hand-Büchlein* (s. Anm. 11), S. 108-111; vgl. auch *ib.* S. 116 f.
- 31) Jean de Labadie, *Traité du Soi, et des diverses sortes de soi, et de renoncement à Soi meme* [ ... ], Herford 1672. Hier zit. nach: Jean de Labadie, *Traktetlein von der Selbst-Verläugnung oder von dem Selbs und Dessen mancherley Arten*. Dt. v. Herman Strauch, Herford 1678, S. 6.
- 32) 俗界との物心両面のつながりを断ち、親兄弟、妻子、家、命をも憎み（「ルカ伝」）、イエスと神とに服従する「自己否定」の努力を、ラバディはしばしば戦いになぞらえる (*ib.* S. 135 f.). *Vorstellung Der Aller-nöthigsten Pflichten Eines rechtschaffenen Christen/ In Einem kurtzen Begriff Des wahren Christenthums* [ ... ], Frankfurt u. Leipzig 1724 でも、自己から解放されるためにはまずもって「断固たる一撃」が肝要である (S. 23)、「この世に宣戦布告をする」のに等しい (S. 28)、その最良の武器は「祈り、謙讓、忍耐」である (S. 27) と書いている。これは原著 *Abrégé du Veritable Christianisme et Téoretique et pratique* [ ... ], Amsterdam 1670 の匿名のルター派牧師による抄訳という意味で興味深く、「訳者まえがき」にはその立場からの好意的な評価が語られている。

- 33) ラバディは自己否定にいたる道程を九つの具体的な修行階梯として説く (*ib.* S. 111-197)。
- 34) 教団では俗界での学究生活、技藝、手工業などを捨てるのが原則とされた。「ユトレヒトの星」とたたえられたシュールマン (その異名については Gottfried Arnold, *op. cit.* 317を見よ) は言語研究を捨ててキリスト教研究に転じ、ヤン・スワンメルダムはシュレースヴィヒの教団でカゲロウに関する研究書を執筆したが、なかなか出版許可が下りないので昆虫研究に見切りをつけ、カイコガの記録を破棄し、写生画をすべてマルチェッロ・マルビーギに譲渡した (Natalie Zemon Davis, *op. cit.* 52)。ワルタ館時代のメーリアンが動植物の観察と写生を続けられた理由はわかっていない。デイヴィス (*ib.* S. 51) はメーリアンが自然研究の宗教的意義を弁護することができたことと述べ、「植物と昆虫は神の被造物であるばかりか、ラバディ自身が語ったように『罪なき自己』の見本でもあった」と理由づけるが、説得力のある説明とは思えない。カイコガはメーリアンにとっても格別な観察対象だったからである。むしろ花と虫の本を夫の助力を得て出版した篤信の主婦の、俗界における「職業」という視点は検討に値するであろう。
- 35) Labadie, *Traktetlein von der Selbst-Verläugnung*, S. 151 f.
- 36) メーリアン一行に目ぼしい財産などありはしなかった。二代目メーリアンは義母 (マリーア・ジビュラの実母) が継父マレルと初代メーリアンの相続財産を蕩尽したと書いている (Selbstbiographie [s. Anm. 6], S. 238 f.)。相続財産については Margarete Pfister-Burkhalter, *Maria Sibylla Merian. Leben und Werke 1647-1717*, Basel 1980, S. 11 f.; N. Z. Davis, *op. cit.* 43 u. 148 を参照されたい。財産共有制もしばしば攻撃的となった。なかでも口汚くラバディを罵った匿名の著者 (*Abbildung/ Und eigentliche Beschreibung/ Deß Lebens und Lehre Jean de Labadie, Eines In Franckreich neu-entstandenen/ und durch Holland biß in Teutschland wolbekandten wunderlichen Schwärmers und listigen Verführers deß leichtgläubigen Volcks [ ... ]*, s. l. 1672) はラバディを現代キリスト教会の敵、贖金づくり、狡猾な狐と呼び、虚栄心と偽善と高慢に支配され、主の霊ならぬ混乱の霊にとりつかれた人間だと罵倒し (S. 3 u. 7 f.)、財産を共有にして宝飾品をだまし取り (S. 10 f.)、ぜいたく三昧と遊興になじみ (S. 12 f. u. 14)、信徒が無理をしてでも寄進した財物をひとり占めにする守銭奴である (S. 16) と毒づいている。Vgl. auch Daniel Colberg, *Das Platonisch-Hermetisches Christenthum/ Begreifend Die Historische Erzählung vom Ursprung und vielerlei Secten der heutigen Fanatischen Theologie, unterm Namen der Paracelsisten/ [ ... ]/ Labadisten/ und Quietisten*, Frankfurt u. Leipzig 1690, S. 414-426; [Anonymus] *Der verschmitzte Welt-Mann und Scheinheilige Tyranne in Engelland/ Olivier Cromwel/ Nebenst Zween seiner geheimsten Rätthe und Creaturen Hugo Petersen und John Loocken. Samt einem Anhang von Johann Labadie*, s. l. 1702, S. 40-44.
- 37) Labadie, *Traktetlein von der Selbst-Verläugnung*, S. 192, 197-200, 208 u. 211. ラバディは聖霊の役割を重視するが、ここでは触れない。
- 38) Labadie, *Vorstellung Der Aller-nöthigsten Pflichten* (s. Anm. 32), S. 32.
- 39) Labadie, *Hand-Büchlein der wahren Gottseligkeit* (s. Anm. 11), S. 109 f.
- 40) *Veritas sui Vindex*, p. 159.
- 41) Johann Georg Schleder, *Theatri Europæi Sechster und letzter Theil/ Das ist/ Außführliche*

*Beschreibung der Denckwürdigen Geschichten [ ... ],* Frankfurt a. M. 1663: Dedicatio v. Matthäus Merian d. J. ただしフランクフルトの人口推移はこの別格都市が戦禍をよくしのいだことを示している。Vgl. Alexander Dietz, *Frankfurter Bürgerbuch. Geschichtliche Mittheilungen über 600 bekannte Frankfurter Familien aus der Zeit vor 1806*, Frankfurt a. M. 1897.

- 42) Helmut Deckert, *op. cit.* (s. Anm. 3) 91.
- 43) Dieter Kühn, *op. cit.* (s. Anm. 5) 401.
- 44) Vgl. Jasper Dankers & Peter Sluyter, *Journal of a Voyage to New York and a Tour in Several of the American Colonies in 1679-80*. Translated from the original Manuscript in Dutch and ed. by Henry C. Murphy, Brooklyn 1867, S. 428.
- 45) トッド (Kim Todd, *op. cit.* [s. Anm. 7] 94-97) は信徒の厳格な日常生活を生々しく描いている。ラバディは現行の教会制度と聖職者の物欲とを手厳しく批判したが、俗人の不徳をやり玉にあげることにしても妥協しなかった。イヴォンはラバディの説教がつねに大衆を狼狽させたと書いている (Gottfried Arnold, *op. cit.* [s. Anm. 17] 992)。たしかにラバディの激しい気性はその著作の随所に見て取れる。人間の腐った部分は、外科医のように鉄と火、小刀と鋏を使って切除せねばならぬ。ささいな嘘言、虚栄心、短気、妄語、ちょっとした粗野な欠点も切り取るべし。割礼は心にも実行され、欲望に仕える主体と心の動きにはキリスト教的否定と抹殺とをもって対処する。方法は選ばずともよし (*Traktetlein von der Selbst-Verläugnung*, S. 157-160)。「人間は腐りきっているから、これを浄化しつくさねばならぬ……。体・心・肉・精神・五感・情緒・思想・想像力・記憶・意思・分別、ことごとくである」(*Hand-Büchlein*, S. 200)。「信徒のあいだに導入された極端に厳格な罰則(破門)は多くの信徒を震え上がらせた。当初の財産共有制はやがて放棄するのを余儀なくされた。聖餐式ではホスチアを拝受せず、洗礼は大人に限定された」(W. D. Fuhrmann, *Handwörterbuch der christlichen Religions- und Kirchengeschichte. Zugleich als Hilfsmittel bei dem Gebrauch der Tabellen von Seiler, Rosenmüller u. Vater. 2. Bd. Halle 1828*, S. 609)。ラバディは二種培餐を支持していた (Gottfried Arnold, *op. cit.* 993)。
- 46) Helmut Deckert, *op. cit.* (s. Anm. 3) 121.
- 47) Helmut Kaiser, *op. cit.* (s. Anm. 6), 123 seq. いずれにしてもワルタ館時代のメーリアンのことはほとんどわかっていない (Dieter Kühn, *op. cit.* 320)。画業の停滞した時期である。ただし歴大な「習作帳 *Studienbuch*」が始まったことは特筆に値する。Vgl. *Maria Sibylla Merian 1647-1717. Künstlerin und Naturforscherin*. Hg. v. Kurt Wettengl, Ostfeldern 2013, S. 130-135.
- 48) カスパルの翌年1687年に二代目メーリアンもフランクフルトに没した。
- 49) Helmut Kaiser, *op. cit.* 150; Kim Todd, *op. cit.* 110-116; Dieter Kühn, *op. cit.* 334-337.
- 50) Dieter Kühn, *op. cit.* 319.
- 51) フランクフルトにおけるシュペーナーの新しい宗教運動、聖書を丹念に読み内省をうながす敬虔主義もメーリアンを故郷に引き止める機会を逸した。シュペーナーが当地に赴任したのはメーリアンの旅立ちの翌年だったからである。ちなみに、シュペーナーはラバディから決定的な影響を受けたが、ラバディの教会離脱と分離主義、聖書観とは相容れなかった。
- 52) マリーア・ジビュラと結婚したとき、すでにグラフはローマを含む各地を巡り通常の画工修業を

経ていたが、高い評価を受けるにはいたらなかったようである。メーリアンの名をはじめて世に知らしめたといわれるザンドラルトの大著『ドイツ藝術総覧』(Joachim von Sandrart, *L'Academia Todesca della Architectura, Sculptura & Pittura: Oder Teutsche Academie der Edlen Bau- Bild- und Mahlerey-Künste* [ ... ]. Nachdruck der Ausg. Nürnberg 1675-1680. Nördlingen 1994. I. Haupttheil (1675), II. Theils III. Buch, S. 339) はグラフを紹介したついでにマリーア・ジビュラにも言及するが、その情報量は夫の三倍ほどもある。また、Adrian Götz, *Deutsche Malerei im 17. Jahrhundert*, Köln 1977, S. 339; *DBE IV* (dtv 2001), S. 130 の無味な説明文を見よ。

- 53) Vgl. Dieter Kühn, *op. cit.* 114 u. 243. 女性が親方として同職組合に所属することもなければ、徒弟から親方にいたる旅修業と昇進の慣行もなかった。

## Der Labadisten Lehre von der „Selbstverleugnung“ aus der Sicht der Merian-Forschung

SATO Masaki

Warum trat im Jahr 1685 Maria Sibylla Merian das Eheleben verlassend in die religiöse Gemeinschaft der Labadisten ein ? Das bleibt immer noch eines der größten Rätsel in ihrem Leben. In der Merian-Literatur wird, nach Dieter Kühn, „wiederholt suggeriert oder souffliert, Maria Sibylla sei mit Mutter und Töchtern nach Friesland gezogen, um auf diesem Umweg ihren Mann loszuwerden“. Man hat ihre diese kühne Handlung manchmal auch der Uneinigkeit der Bekenntnisse des Ehepaars zugeschrieben: soll sie sich doch zur reformierten Kirche bekehrt haben. Sie scheint aber bei der Abreise von Frankfurt offensichtlich die Möglichkeit zur Heimkehr behalten zu haben, denn sie hat damals ihre Bürgerrecht erneuert. Wozu musste sie denn nach Friesland zu den Labadisten fahren ?

Labadie selbst wie auch die Labadisten wurden wegen der Art ihrer missionarischen Tätigkeit sowie ihrer Lehre als solcher oft verfolgt. Die Verslossenheit ihres „Hauses“ erweckte Verdacht auf irgendeine mögliche Konspiration, ihre Lehre vom Vorbehalt der Sakramente ließ sie mit den Wiedertäufern identifizieren und ihre Vorstellung von der Heiligen Schrift und der Ehe ließ sie ketzerisch aussehen. Merian, die offenbar durch Unterweisungen ihres Halbbruders Caspar, der schon vor ihr bei den Labadisten im Schloss Waltha in Wieuwerd wohnte, sowie durch ihre eigene Lektüre über die Lehren der Labadisten ziemlich wohl unterrichtet war, muss — angesichts der Schwierigkeiten des Lebens, wie der Trennung von Tisch und Bett, des Unterhalts ihrer wieder verwitweten Mutter und zwei Töchter, der schlechten Aussicht ihres Berufs zur Malerin bzw. Handwerkerin u. a. — in der Labadisten Lehre von der „Selbstverleugnung“ eine gewisse Möglichkeit zum Überleben gefunden haben, denn diese Lehre hatte auch zum Inhalt, dass Gläubige ihre Güter in der Welt aufgeben und sie als Gemeineigentum der Labadistengemeinde stiften sollten. Und es gelang ihr denn auch, unter dem gottesfürchtig bekleideten System des Gemeingutes mehrere Jahre bei den Labadisten ohne große Hindernisse zu überleben.